

1 研究テーマ 「学級経営における職員集団の実践力向上を目指して」

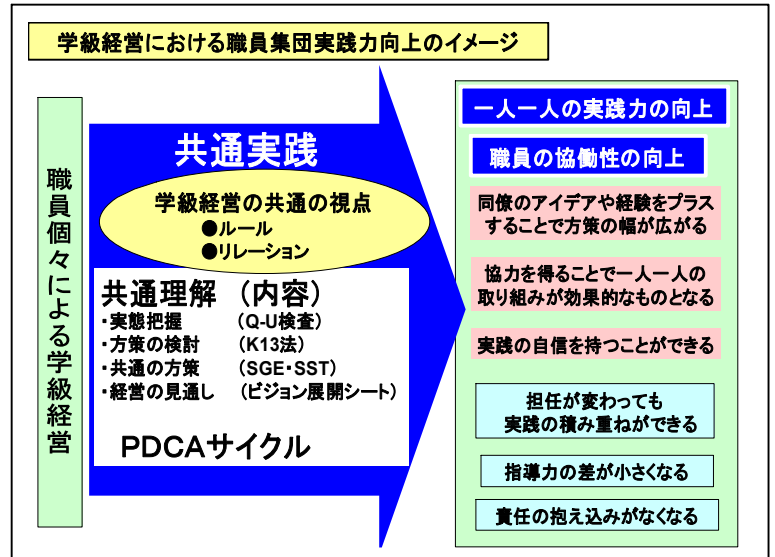
2 はじめに

現在の学校は子どもたちの規範意識が低下し、対人関係をうまくもてなくなってきており、その結果、従来機能していた学級集団の自治力、教育力が低下し、学級経営の揺らぎが大きな問題となっている。この問題を解消していくには、教師の学級経営における実践力を高めることが重要だと考える。

3 研究の目的

学級経営は職員個々によるところが大きく、指導の方向は別々で、取り組みの効果は個人の力量任せになってしまいがちである。小規模校である本校もその傾向にある。

そこで「ルール」と「リレーション」という共通の視点を持ち、各学級の「児童の実態」「方策」「経営の見通し」を共通理解する場を持つ。そしてPDCAサイクルを意識して経営を共通実践していくという体制に変えることで、職員一人一人の学級経営の実践力も高めると同時に職員の協働意識の高まりを目指す。



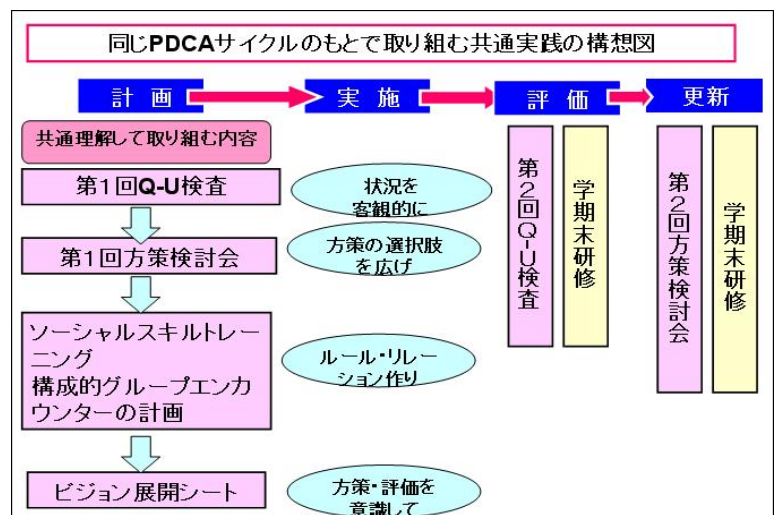
4 研究の内容

(1) 共通実践

- ①学級の状況を客観的な視点で把握するためにQ-U検査を行い、結果を全職員で分析する。
- ②次に分析をもとにK13法を使って全職員で検討し、各学級にとって効果的な方策を模索していく。
- ③さらに児童のルールやリレーション作りに効果的であるとする「ソーシャルスキルトレーニング」「構成的グループエンカウンター」は各学級、共通に実施する方策とする。
- ④この方策をビジョン展開シートに記入し、日々、意識しながら経営を行う。

この共通理解して取り組む4つの内容をそれぞれの学級経営の「計画」に位置づけ、方策を「実施」し2回目のQ-U研修、学期末の振り返り研修をそれぞれの「評価」と「更新」に位置づけて取り組んだ。

経営の方針や方策を意識しながら目指す学級像に向けてブレのない経営ができるようにビジョン展開シートに右の内容を記入して取り組んだ。目指す学級像や実現のための道筋を明確にしておく必要感が高いものがあつた。



**ビジョン展開シート**

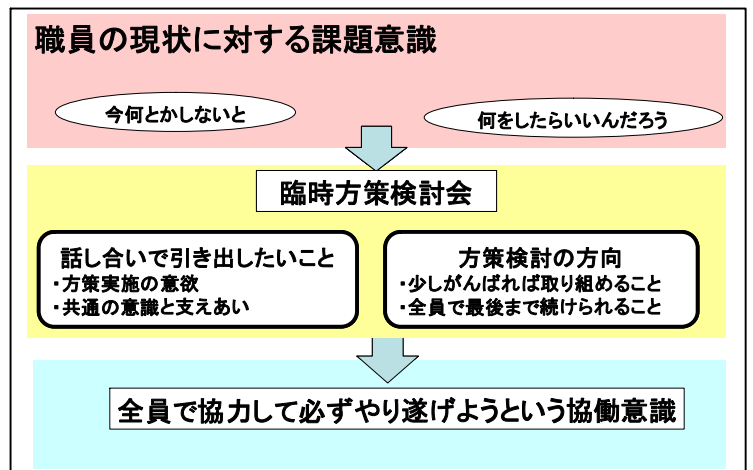
評価基準	変容・効果 予想される	決定した方策 担当が	検討会で	目指す姿・学級の現状・目標
SST・SGEの計画と評価基準				目指す姿・学級の現状・目標
PDCAの年間の見通し(教務より提案)				

## (2) 児童の実態に合わせた臨機応変な対応

学級での取り組みを行っていくうち、11月に入り、職員全体の学級を越えた児童の人間関係に対する課題意識が高まってきた。「今何とかしないといけない」「何をしたらいいのだろう」と考えていることが分かり、全員で臨時方策検討会を持った。

この話し合いで引き出したいと考えたことは「方策実践の意欲と支えあい」ということである。

そこで、「少しがんばれば取り組めることで、全員で最後まで続けられる方策」という方向で検討するよう提案した。全員が同じ課題意識を感じ、臨機応変に話し合いが持てたことで「今まで以上に全員で必ずやり遂げよう」という協働意識の高まりが見られた。

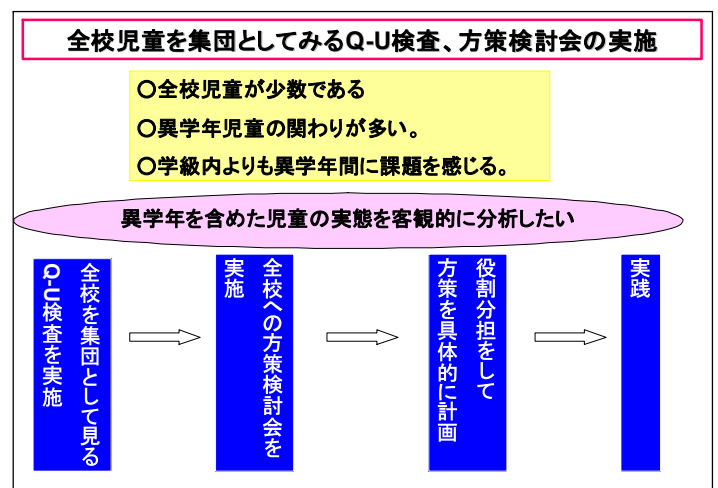


## (3) 全校児童を集団としてみるQ-U検査、方策検討会の実施

全校に対する課題意識が高まったことをきっかけに各学級のQ-U検査に加え、さらに全校児童を一つの集団と考えてのQ-U検査、方策検討会を実施するよう働きかけた。

所属校は、全体が少数で、学校行事、学習、休憩など異学年との関わりが強く、また、課題は異学年の関わりの中にあり、全校の中で方策を実施すべきだと感じたからである。

検討した方策の実施に向けて、役割分担して具体的な計画を立て、全職員で全校児童に対して取り組むといった方向へと発展していった。



## 4 研究のまとめ

全職員で共通理解して取り組んだ4つの内容は 一人一人の学級経営にかかわる見方・考え方の幅を広げ、職員の協働の意識を高めるのに有効に作用した。

○Q-U検査結果を全員で分析することによって、一人一人の児童に対しての見方が広がった。

○方策検討会によって同僚の持っていたアイデアが自分自身の選択肢の一つとなり、実施する方策の幅が広がってきた。

○ビジョン展開シートで「目指す姿」「課題」「方策」「評価」を明確にして取り組むという手法を取り入れたことで、方策を見直しながら継続的に実施することができた。

○各担任による自分の学級への取り組みという体制が、全職員による全校児童への取り組みという体制へと発展していった。

## 5 今後の課題

本年度の成果として職員の協働意識の高まりを上げたが、さらに協働性を高めていくために、ゴールイメージとして学校の「目指す児童像」を明確にすること。そして、その実現に向けて全員で方策を検討、実施するという体制を柱に、各学級の経営を考えるとといったスタイルに移行する必要がある。

## 6 おわりに

近年、組織の中での「コミュニケーション」「チームワーク」といったことの重要性がクローズアップされてきており、今回の研究は職員の力を結集することで職員一人一人の力を高めることができるということが実感できた。しかし、この取り組みは1年間で大きな成果が得られるものではない。本年度の実践をいかし、全校児童のルールとリレーションをさらに高めていけるように全職員の協働的な取り組みを今後も継続的に実施していきたいと考える。